

SHINCLUB 146

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



SHO 撮影：山森 誠



中野富士見町の家 撮影：篠澤 裕

今月のトーク/monthly talk

余白

余白とは、余りの部分とか、欄外と言う意味で、英語だと「マージン」と言うんだそうです。余りとは、使わないという意味もあり、役に立たない、無駄という印象も受けますが、でも余白の無い文章は読みづらい・・・というより、読む気にすらなれません。

「図と地」の言葉通り、白い地があるからこそその黒い字であり、余白とは、あえて字を書かないゆとりや贅沢なのかもしれません。

今月ご紹介する2つの建物は、いずれも狭い敷地にもかかわらず、新たな外部空間の余白を生み出しながら、内部ではより快適な広さを確保することに挑んでいます。

左の「SHO」は、傾斜地に建つ事務所併用共同住宅ですが、天空率を利用して高さを確保し、前面に空地を取っています。また隣接する2項道路側に共同住宅のテラスを配置し、2つのファサードを持つ建物になっています。

右側の「中野富士見町の家」は、旗竿敷地の奥に位置しながら、3階建てにして、1階部分に空地を生み出したことで、周辺に新たな通風、日照を生み出しました。

余白が生まれると、物理的な開放感だけでなく、周辺の人間関係にも影響を与えます。もとはといえば、外部空間の方が清潔で心地よく、生活を重ねる内部空間の方が不潔になっていくものです。だからこそ、住まいは窓を開け、光や風そして音や気配を取り込むのです。

その外部空間を汚してきたのは私たち自身です。自分で汚した環境を嫌って閉じこもっていることこそが本末転倒です。私たちが求めている快適は、外にあるということを忘れてはいけません。

狭い路地を囲む家々は、騒音やプライバシーの問題もありますが、互いに気配が感じられたり、朝夕の挨拶を交わせる空間が生まれることは、オープンな人間関係を生み、周辺環境も抛りよくなることでしょう。建物の条件にもかかわらず、外部空間=余白を作ったうえで、内部のやりくりをする…という手順を選んだ2つの作品から、多くのヒントを得ることができると思います。

このShinCLubも字面を少なくして、余白を多くしろといわれます。反省。

SHO



厳しい法規制、敷地条件をクリアし、最大限の幾何学形態確保とプロポーションにこだわる

1階は事務所、2-3階はワンルームマンションといわれる4住戸からなる事務所兼共同住宅である。共同住宅はワンフロア2住戸で、最大住戸面積は22㎡程度であるが、2階西側住戸はバルコニーを設けなくてその分を広くし、3階住戸は10㎡程度のロフトを設ける等、トイレ浴室の工夫と合わせ、狭さを感じない快適な住空間を確保している。

その空間確保の為、東側と北側は、最大で2.25m地中に埋まっているにもかかわらず、隣地境界から10mmのクリアランスで建物を配置し、曲がりくねって勾配のある前面道路側は天空率を最大限駆使しながらの計画となった。隣地地主の協力無しには不可能で、建て主さんと近隣の良好な関係があってこそ成立した計画である。

プランの特徴の一つは、東側住戸のバルコニーを、あえて東面に設け、南面と東面にバルコニーを分散したことだ。東側は、バルコニー先端で隣地から最小150程度のクリアランスなので、一般的にはバルコニーを設けないところであるが、眺望が開け、バルコニー前の隣地に建物が建つ可能性が殆ど無いと思われたことから、今回の案に踏み切った。法規上の必要採光は南側正面窓からの確保となる。

共同住宅は、連続したバルコニーでデザインが決まってしまうケースが多い中、2方向にバルコニーを分散させることと、正面中央を縦に走る構造的にも意味のあるスリットにより、一般的な共同住宅とは違うシンプルな外観が可能となった。そのスリット奥には、躯体埋め込みの縦樋を設け、東面では、バルコニー袖壁を欠込んでアルミ材で蓋をした縦樋とし、樋をファサードから消しながら、シンプルさとプロポーション、そして居住性にこだわった。
(中尾 実)



①南側外観②3階西側賃貸住戸リビング。天井高3.7m③同じく3階東側賃貸住戸。ロフト下部をキッチン・浴室・トイレ・収納とし、小さなスペースも有効活用④広々としたロフト部分⑤1階司法書士事務所

所在地：川崎市 構造：RC造
規模：地上3階 用途：事務所・共同住宅
設計：中尾実 / ナカオアトリエ
竣工：2012年3月
施工担当：常田 撮影：山森 誠

中野富士見町の家



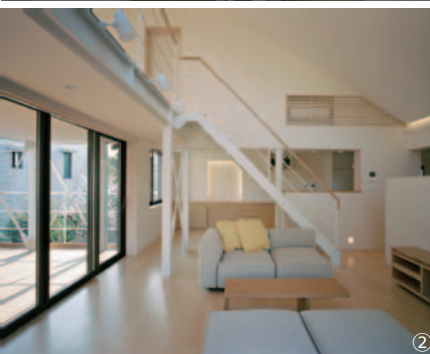
3階建てによって、周辺にも良好な通風・採光条件を生み出した住宅

2項道路の突き当りに位置するこの住宅の敷地は、土地を細分化するときの手法として 都市部ではよく見られる形状の敷地である。土地の大きさにもよるが、多くは2mの接道以外は隣地に囲まれるために、日当たり、通風が確保しにくい場合が多く、住環境としては条件が悪くなる傾向にある。

そうした傾向をクリアするために、2階建てでは面積を満たすと空地が確保しにくいのであえて、紛争予防条例や日影規制の対象となってもメリットがある3階建てを選択した。3階建てによって生み出された空地は、通風、日当たりの面から隣接する住宅地の空地と連続させ互いに結び付けられたことで、3階のテラスは周辺を含めた空地全体のヒンジのような配置となった。こうして生み出されたテラスとリビングは住宅内では1階と3階の2世帯の接点となる場所となり、同時に私道周辺に暮らす親戚同士の接点となることで人間関係と住環境も文字通り「風通しの良い」関係となることを期待している。

構造は1階がRC造壁構造、ボリュームスタディを重ねると3階寝室は東側に突き出る形にならざるを得ず、2、3階はS造の混構造となった。S造は、125度の柱と125×250×6×9の梁とブレースを基本に構成、スラブは乾式工法で軽量化を図った。仕上げは、防火とスチールによる熱橋防止を兼ねるためフェノールフォームと木片セメント板の複合板を柱の外側の胴縁に固定した外断熱となっている。
(石川雅博)

所在地：中野区
構造：RC造+S造
規模：地上3階
用途：専用住宅
設計：石川雅博・藤本香 / dpa (ディーピーイー)
竣工：2012年3月
施工担当：間瀬 撮影：篠澤 裕



①2階リビング。テラス、吹き抜け、3階寝室が見える②2階リビングダイニング③玄関内部。ベンチや手摺りをしつらえたバリアフリーとなっている④玄関前夜景。LEDのライン照明が軒からRC壁を照らしている⑤私道からの夜景

鉄造建築の可能性

中尾 実 / ナカオアトリエ



IRONY SPACE <2003>
(設計：アーキテクトファイブ)
鉄の力強さとやさしさの表現を
求める、構造設計者のアトリエ。
全体が鉄の面で構成された、100
年間のメンテナンスフリーを目指
して造られたシェルターでもある。

Minoru Nakao



中尾 実氏 / ナカオアトリエ

撮影：アック東京

今月は、「SHO」の設計者、中尾実氏をお迎えしました。丹下健三・都市・建築設計事務所に在籍後、丹下事務所 OB4 人が始められた「アーキテクトファイブ」という設計事務所に勤められ、多くのプロジェクトを担当されました。

—丹下事務所に在籍されていた頃はどんな仕事に携わったのでしょうか。

中尾：実現しませんでした。キングスセンターという 12 万㎡規模のシンガポールのショッピングセンターや、横浜美術館、広島国際会議場、シンガポールインドスタジアムなどでした。他では得られないような貴重な経験でしたが、小さくても設計から現場監理までの一通りの仕事を早く経験したい思いが強く、声をかけて頂いた「アーキテクトファイブ」に入所し、16 年を過ごしました。なので、私の設計実務経験、デザインノウハウの基礎は、「アーキテクトファイブ」で培われたものだと言えるでしょうね。多くのことを学び、良い経験をさせて頂きました。勿論デザインというのは自問自答の中から生まれてくるものですから、自分で開拓していくしか無いのですが、こだわりのある良い建物に携わった経験は大きな財産です。

※アーキテクトファイブ

川村純一、堀越英嗣、松岡拓公雄、城戸崎博孝の 4 名の共同主宰（パートナーシップ）による設計事務所。1986 年に設立。2006 年を節目に新たな展開を模索し、4 人のパートナーがそれぞれ独立した組織を持ち、必要に応じて連携する緩やかなネットワークとして組織を再編。

中尾氏は、IRONY SPACE、モエレ沼公園、三戸町役場・三戸町保険センター、PFC / 桜美林大学プラネット淵野辺キャンパス、LINK / dB-SOFT・BUG 本社研究所など多数のプロジェクトを担当、参画。

中尾：どれも思い出深いプロジェクトでしたが、アーキテクトファイブのデビュー作となった「LINK」と最後に担当した「IRONY SPACE」（梅沢建築構造研究所）は、特に印象深いです。「LINK」は設計から現場（常駐）監理までを担当した最初の建物である上、内部空間で、イサムノグチさんとコラボができたのは貴重な経験でした。「LINK」の為に制作された彫刻が設置されたのですが、イサムさん自らが T 定規と三角定規で描いた図面の通り、彫刻周りのスペースが造られています。「IRONY SPACE」は梅沢先生から喜

びの言葉を何度が頂きましたが、自己満足度としても、これまで私が携わった建物の中で一番ではないかと思っています。

高さ 10cm のデッキプレートに、厚さ 4.5mm の鉄板を両側から溶接し、ウレタン断熱材が充填された「デッキプレートサンドイッチパネル」で、地下以外の屋根、壁、床の全てが造られています。鉄骨造の範疇になるのですが、骨となる一般的な柱、梁は無く、構造その物が外装、内装も兼ねる鉄板建築は、他には例が無かったと思います。内部の見所の一つは、三層のフロアーを繋ぐ吹き抜けにある階段で、22 ミリ厚の鉄板が折り紙の様に折れ曲がっただけの構成で成立しています。最もシンプルな階段です。踊り場で 1t の荷重に耐えられる様に設計されていますが、踊り場を直に支える構造はなく、浮いているようにも感じます。外壁のコールテン鋼は近隣に配慮し、歩道側は RS コートという錆安定処理を施した塗装になっていますが、いずれ全体が同じ錆色一色になります。高橋工業（※）の造船技術が前提の建物で、鉄の様々な可能性を感じました。

※高橋工業＝宮城県気仙沼の、造船技術から建築分野にも進出した会社。梅沢氏の自邸 IRON HOUSE、せんだいメディアテーク、神保町シアタービルなども手がけるが、昨年の東日本大震災で被災、大津波で工場は全壊。昨年 12 月に仮工場で稼働再開。

以後、独立してからも、梅沢先生とはお付き合いいただき、今回の「SHO」も構造設計をお願いしました。「IRONY SPACE」の経験があったこともあり、今回、「SHO」のゴミ入れをコールテン鋼で制作してみました。外構を白い玉砂利洗い出しとし、そこにオブジェのように見立て、堀沿いに配置しました。小規模の共同住宅の場合、建物の前に中のゴミが見える既製品のゴミ入れが設置されたり、ゴミ袋をそのまま道路沿いに出す場合もあったりと、街路景観も損ねているものも多いので、何とか改善したいという観点からも、今回は良かったと思っています。

建築は、建て主さんの要望以上のものを目指す為にも、場の持つポテンシャルを最大限引き出すことが常に求められます。そして、当たり前ですが、建て主さんに満足して頂くと同時に、設計者の責任として、自身が満足できるレベルの建物にする必要があると常々思っています。今後も、あらゆる仕事に積極的にチャレンジしていきたいと思っています。

—本日はどうもありがとうございました。

IRONY SPACE
内部の階段

「IRONY SPACE の仕事は 今の自分の力になっています」

中尾 実

1980 年 日本大学工学部建築学科卒業
1982～86 年 丹下健三都市建築設計研究所勤務
1986～2003 年 アーキテクトファイブ勤務
2004 年～ 日本大学工学部（福島）非常勤講師
2004 年 ナカオアトリエ 設立 主宰
2006 年 株式会社ナカオアトリエ 設立 主宰

SHO ゴミ入れ



「大型店舗ビル『ヒカリエ』竣工、さらに期待される渋谷駅周辺の再開発」 4月26日



長い間工事中だった旧東急文化会館跡地に、やっと完成した東急の大型店舗「ヒカリエ」。連休中は多数の人出で賑わいました。

渋谷駅は、6駅8線の鉄道路線が結節するとともに、都内最大級のバスターミナルを持つ全国有数の公共交通ターミナルとなっています。また、平成24年度には東急東横線が地下化され、平成20年6月に開業した東京メトロ副都心線との相互直通化が図られることから、交通の利便性は一層充実する予定です。しかし、駅施設は大正時代から増改築が繰り返されており、耐震性の向上、バリアフリー化、乗換利便性の向上などが必要となっています。また、現状の駅周辺をみると、安全で快適な歩行者空間の確保、交通結節機能の強化、自動車交通の混雑や錯綜の改善、渋谷川のあり方など、多くの課題を抱えています。

(渋谷区街区基盤整備・都市計画案より)

とにかく、橋が多い街です。高齢者や障害者には優しくない街であることは間違いありません。東京都と渋谷区の都市計画案では東西駅前広場をつなぐ大きな駅ビルが建設され、谷地形をフラットにつなぐ東西方向のスカイウェイの整備、八子公前広場の拡充や、東口前広場の創出、バスターミナルの再編成やR246の拡幅、タクシー乗降場の地下化など、様々な計画が予定されているようです。いくつもの工事が、段階的に行なわれていくことでしょう。

30年前、道玄坂には、主な店はモドリヤとヤマハぐらいしかありませんでした。次々と建つ西武、QFRONTの大型ビジョンに感じた活気を思い返しなが、今また新たな渋谷の街づくりを期待を込めて見守っていききたいものです。



①明治通り北側から「ヒカリエ」を臨む。駅に向かって銀座線、旧陸橋（現在閉鎖）、新陸橋と明治通りを3本の橋がかかっている②地下鉄副都心線からのB3階への通路。左側吹き抜けの長いエスカレーターを3本乗り継いで地上へ。右側が店舗入口③いつの間にか修復が終わっていた首都高3号線の外壁。明治通り、R246と幹線道路や鉄道が分断する人の流れをスムーズにするには広場や歩道の再生が求められている④東急東横線のめがねのような駅舎も今年で見納め⑤ヒカリエ南側の道路は、歩道が拡張されて植栽もきれいに。ただし風通しがよくなりすぎた感じがある

「丹下健三氏の隠れた名作『戦没学徒記念若人の広場』慰霊施設の修復」

今月の作品「SHO」の取材中に、設計の中尾実氏から、隠れた丹下健三作品についての話を聞く機会があり、ぜひご紹介させていただくことにしました。

広島平和記念館、東京カテドラル、東京都庁舎など、数多くの作品の中で、丹下氏自身がその存在を封印したのが、淡路島にある「戦没学徒記念若人の広場（昭和42年竣工）」です。

昭和37年（1962年）、東京オリンピックを前に代々木体育館などの設計で忙しい頃、丹下氏は、第二次大戦中に学徒動員され、工場労働や戦地で犠牲になった学生の遺品や資料を展示する建物の設計を依頼されました。淡路島の南端にあり、瀬戸内海や大鳴門橋が見渡せる、南あわじ市大見山での建設が進められましたが、昭和42年の完成直前に依頼主の背景に政治家や自衛隊の関与を知って、丹下氏は竣工式を欠席、自分の作品にも加えませんでした。<以後、1975年『建築と都市』（世界文化社）にのみ掲載。2002年刊行の『丹下健三』（丹下健三・藤森照信、新建築社）

発行までその存在がほとんど知られなかった>

「若人の広場」は開館したものの入場者の少なさや運営に苦しんだ末、1994年頃には財政が破綻して閉鎖状態となりました。1995年の阪神淡路大震災で建物の一部が損壊。収蔵品は2004年に運営者から立命館大学に寄贈されましたが、空き家となった建物だけが残り、現在に至っています。

現在は一部の許可を得た人を除いては立入禁止となっていますが、打ち放しのヴォールト（かまぼこ型）の天井と壁・柱の躯体が、柱頭や壁上部にあるピン接合の金物で持ち上げられて、完全に分離しているかに見える展示館は崇高な気配を漂わせ、城のように重厚な石積み、ペンの先を模した慰霊塔とともに、平和への思いを新たにすると名建築という声が多くありません。2010年、地元南あわじ市が買い取り、2012年、市は傷みの目立つ施設を補修して残し、公園として整備すると発表しました。完成には数年を要するようですが、その際には、ぜひ訪れたいものです。



①石積みの外壁。崩落予防のネットが掛けられている
②展示棟内部。ヴォールトの天井は、支える柱から浮いてみえる。塹壕をイメージしたものといわれる。中央の碑には犠牲となった15歳の中学生の詩が刻まれている③天に向かって伸びるペン先をイメージした慰霊塔。学徒の魂を慰める（撮影：中尾実氏）

編集後記

・5月6日午後、茨城県つくば市など関東の広い範囲で竜巻や落雷などによる被害が相次ぎました。その破壊力には驚くばかりです。日本では、これまで想定していなかった気象現象が起こるのだと再認識して、とにかく安全な場所への避難しかないようですね。